

米国のお家芸に期待、過度な悲観は禁物

2013年6月7日(金)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 藤代 宏一
TEL 03-5221-4523

16:04 現在

<主要株価指数>

	終値	前日比
日経平均株価	12877.53 円	▲26.49 円
TOPIX	1056.95 pt	▲13.82 pt
NYダウ	15,040.62 ^{ドル}	80.03 ^{ドル}
DAX (独)	8,098.81 pt	▲97.37 pt
FT100 (英)	6,336.11 pt	▲83.2 pt
CAC (仏)	3,814.28 pt	▲38.16 pt
上海総合※	2,210.63 pt	▲31.477 pt

<外国為替>※

ドル円	96.85 円	▲ 0.12 円
ユーロ円	128.39 円	▲ 0.06 円
ドルユーロ	1.3256 ^{ドル}	0.001 ^{ドル}

<長期金利>※

日本	0.845 %	0.025 %
アメリカ	2.077 %	▲ 0.012 %
イギリス	2.024 %	0.015 %
ドイツ	1.521 %	0.010 %
フランス	2.113 %	0.054 %
イタリア	4.364 %	0.227 %
スペイン	4.691 %	0.248 %
オーストラリア	3.255 %	▲ 0.133 %

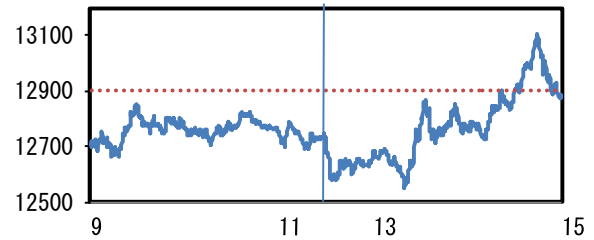
<商品>

NY原油	94.76 ^{ドル}	1.02 ^{ドル}
NY金	1415.70 ^{ドル}	17.30 ^{ドル}

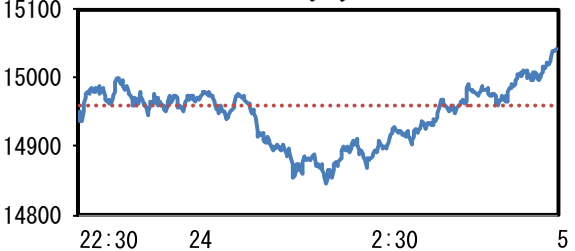
※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。

(出所) Bloomberg

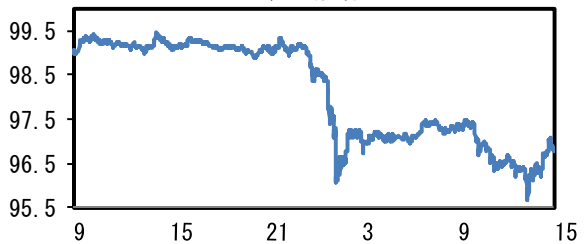
(円) 日経平均



(ドル) NYダウ



(円) ドル/円相場



【海外株式市場】 ～イニシャルクレームがやや気掛かり～

6日の米国株式市場、NYダウ平均株価は反発。前日比+80.03^{ドル}の15040.62^{ドル}で取引を終了。雇用統計の発表を翌日に控えて神経質な展開となったものの、結局は高値引け。QE早期縮小観測が世界の金融市場を揺らしているが、震源地に近い米国株は比較的冷静な展開となっている。

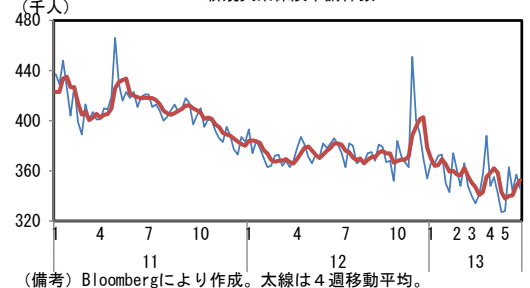
ECBは理事会にて、予想どおり政策金利（リファイナンス金利0.5%、限界貸出ファシリティ金利1.0%、預金ファシリティ金利0.0%）の据え置きを決定。

BOEもMPCにて、予想どおり政策金利（0.5%）の据え置きと資産買取プログラム（3750億ポンド）の現状維持を決定。

新規失業保険申請件数は34.6万件と市場予想（34.5万件）より若干弱い内容。同時に前週分は35.4万件→35.7万件に修正された。4週移動平均は35.3万件と前週（34.8万件）から小幅増加（図）。

5月入り後に低下傾向が一服している。

新規失業保険申請件数



(備考) Bloombergにより作成。太線は4週移動平均。

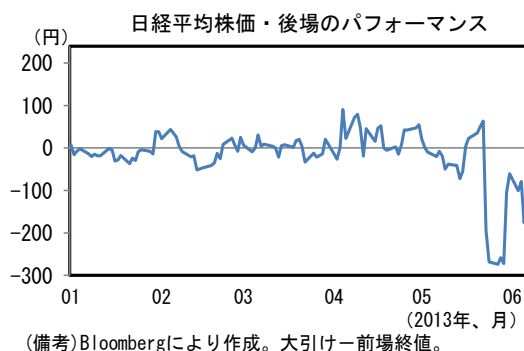
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

【外国為替相場・債券市場】 ～ユーロ、利下げの可能性は後退～

6-7日の外国為替市場では、ドルがユーロや円に対して売られる展開となった。ユーロドルはECB理事会後の会見でドラギ総裁が利下げ（マイナス金利導入・コリドー縮小、以下同義）に慎重な姿勢を見せたことをきっかけにユーロが急速に買い進まれた。ECBスタッフの経済見通しは2013年が▲0.5%→▲0.6%に下方修正、14年が1.0%→1.1%に上方修正。ドラギ総裁は足もとのサーベイ指標改善に言及した上で「ユーロ圏の景気は13年中に安定化し、その後緩やかな回復に向かう」と発言している。ドル円は米長期金利の急低下に沿う格好で急速に円高シフト。ストップロス巻き込み一時1ドル=95円台に突入する場面もみられたが、米長期金利が低下幅を縮小したことを受けて97円台まで戻した。米10年債利回りは1bp低下の2.08%（変動幅は14bp）。ドル円は日本時間に入ってもボラタイルな展開が継続。

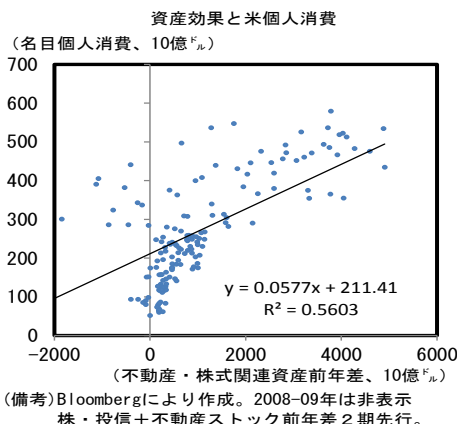
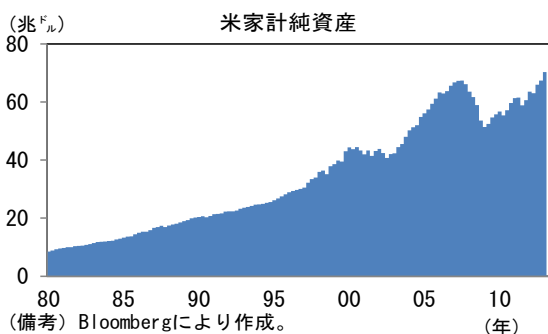
【国内マーケット】 ～引け間際の売りは健在～

7日の東京株式市場、日経平均株価は続落。前日比▲26.49円の12877.53円で取引を終了。海外時間に進んだ円高が嫌気され軟調に始まった後、後場に一時200円高となる場面もみられたが、5.23ショック以降に定番となった引け間際の売りに押されマイナス転化。雇用統計を今晚に控えてポジションを手仕舞いたいという投資家心理を如実に反映している。日本株は、4月から5.23ショック直前にかけては買い遅れがリスク要因として認識されていたようだが、5.23ショック以降は売り遅れがリスク要因として意識されている。海外時間の米債市場と為替市場が落ち着きを取り戻さない限り、こうした動きは継続する可能性が高い。



【注目点】 ～米国のお家芸に期待、過度な悲観は禁物～

昨日発表された米財務勘定（※旧資金循環統計、1-3月期）によると、家計の純資産残高は前年比で9.6%（前期比+4.5%）増加し、70.3兆ドルとなり過去最高を更新した（左図）。家計保有の不動産は前年比+10.7%、株式関連資産は同+12.5%となり、住宅価格と株価の上昇がバランスシート改善に寄与した。住宅バブル崩壊後、長らく続いた家計のバランスシート調整はほぼ完了したと考えられ、個人消費や住宅投資が回復力を強める条件が整いつつある。年初からの増税など財政緊縮が重石となるものの、身軽になった家計部門は資産効果を追い風に回復経路を辿ると考えられ、民需は堅調さを維持しよう。これは米国のお家芸である（右図）。足もとの金融市場はQE早期縮小観測に神経質になっているが、織り込みが一巡すれば市場参加者の視線は堅調な実体経済に向かうはずだ。過度な悲観は禁物であろう。



【NYダウ・日経平均株価予想レンジ（5営業日内）】

NYダウ 14550～15550^{ドル} 日経平均株価 12000～13500円 ドル円 94.5～99.5円

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。